

雁頭沢遺跡

(第3次)

住宅団地造成に伴う緊急発掘調査概報

1989.3

長野県原村教育委員会



雁頭沢遺跡

(第3次)

住宅団地造成に伴う
緊急発掘調査概報

序

現在、我が国では順調な経済成長に伴い、住宅建設が急速に増加しているといわれています。また一方では、都市部の急激な地価上昇や生活環境の悪化に伴い、より安価で快適な土地を求めて、宅地化の流れは、都市部から郊外へと変わってきています。

この原村でもその例に洩れず、近年、それまで林野や田畑であった土地が造成され、宅地化されるというケースが増加してきています。

今回発掘調査を行った雁頭沢遺跡も住宅団地造成計画に先立つ発掘調査でありました。二度にわたり行われた確認調査と本調査によって縄文時代中期の環状集落址であることが判明し、数多くの貴重な考古学的資料を得ることができました。

今回の調査に当り、多大な御理解と御協力をいただいた、小林諒一氏並びに榑両角建設の方々、また調査から報告書刊行に当り、お世話になった関係者各位に深甚なる感謝の意を表し序とさせていただきます。

平成元年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例 言

1. 本報告は住宅団地造成に先立って実施した、長野県諏訪郡原村室内に所在する雁頭沢遺跡の第3次緊急発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、地主小林諒一氏の委託をうけた原村教育委員会が、昭和63年10月13日から11月17日にかけて実施した。
3. 現場における遺構実測は平林とし美、記録は平出一治・伊藤証・平林、写真撮影は平出、図面の作図とトレースは平林、執筆は平出・伊藤・平林は話し合いのもとに行った。
4. 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、53の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、長野県教育委員会文化課指導主事小林秀夫・芦部公一、井戸尻考古館館長武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序

例 言

目 次

1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過	2
3 遺跡の位置と環境	3
4 グリッドの設定と調査方法	6
5 土 層	9
6 遺 構 と 遺 物	9
7 ま と め	25

参考文献

発掘調査団名簿

1 発掘調査に至る経過

本遺跡に住宅団地造成計画が持ち上がったのは、昭和62年3月で、長野県教育委員会文化課の指導をうけて協議を進め、同年6月5日に行われた「住宅団地造成に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化課・原村土地開発公社・原村教育委員会の3者であった。

造成予定地に隣接する道路部分は、昭和54年度に改良工事に伴う緊急発掘調査を実施し、縄文時代中期中葉の住居址1軒と小竪穴4基を発見調査している。このことから、縄文時代中期の集落遺跡であることは判ってはいたが、造成予定地内における遺構の埋没状況は判らないままの協議であった。

その席上、遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことから、現状のまま保存できないかを話し合ったが、当村の人口は増加傾向にあり、宅地不足が深刻な問題で造成を進める意向は強く、出来る限り埋没保存を計る方向で意見調整を行った。それには、遺構の埋没状況を把握することが大きな課題で、できるだけ早い機会に確認調査を実施することとなる。

その後、事業主体者が変わったこともあり、文化課の指導を受ける中で協議を進め、昭和63年10月13日から確認調査を実施し、遺構の埋没状況がほぼ判明してきた21日に調査を打ち切り、27日に再協議を行った。

再協議では、住居址と小竪穴を確認していることから、保護については当初計画を変更するなかで、埋没保存が可能な箇所は、遺構を確認した時点で調査を打ち切り、造成工事で遺構に影響を及ぼす範囲については精査を行うこととなる。

造成地はA～Fの6区画が計画されている。A区画はその全面を、西外れの石積施工箇所はその範囲の精査を行うことになる。協議出席者は長野県教育委員会文化課・小林諒一氏の代理人両角建設・原村教育委員会の3者であった。

諏訪南インター原村工業団地内遺跡確認調査を実施していることから、その調査が終了しだい継続調査を行うこととし、11月7日に調査を再開し、17日に終了することができた。



第1図 原村城の地形断面図模式図(赤岳—雁頭沢—宮川ライン)

本遺跡の発掘調査は3回目にあたり、便宜上、昭和54年度の調査を第1次、昭和57年度調査を第2次、本調査を第3次発掘調査と呼ぶことにした。

2 発掘調査の経過

- 昭和63年10月13日 発掘準備をはじめめる。
- 10月15日 発掘機材の搬入を行う。
- 10月17日 テントの設営。調査予定地の表面採集を行い、グリッド設定・発掘をはじめめる。出土遺物は少ない。
- 10月19日 層位別にグリッド発掘を行う。XX-50・XY-50グリッドで住居址と思われる落ち込みを認める。XP-54・XQ-54グリッドで土器を伴う小竪穴を検出し、精査を行う。YA-46グリッドで石皿の破片が出土。
- 10月20日 昨日確認した落ち込みの続きをYA-51・52・53グリッドで認め、住居址の埋没を確認し、第2号住居址と呼ぶことにする。小竪穴数基を確認する。XT-54グリッドで横転する土器が出土。
- 10月21日 グリッド発掘と記録をおこなう小竪穴数基を検出する。
遺跡の性格がほぼ判明したため、保護協議の準備を進め、検出遺構は柵柱による破損を考慮し、10cm位の埋戻しを行う。
- 10月27日 保護協議。
諏訪南インター原村工業団地内遺跡確認調査を行っているため、その調査が終了しだい継続調査を実施することとなる。
- 11月7日 調査を再開する。宅地造成用地西外れ石積箇所グリッド発掘を層位別に行う。第3号住居址と小竪穴を検出し、住居址の精査をはじめめる。
- 11月8日 宅地A区画は重機による表土剥ぎを行う。グリッド発掘では小竪穴数基を検出。発見遺物の多いグリッドもみられる。
- 11月9日 宅地A区画の遺構確認作業を進める。小竪穴・沙址（溝址）を検出。グリッド発掘ではXM-56・XN-56・XN-54グリッドで第4号住居址を確認。
- 11月10日 宅地A区画で重複する第5・6・7号住居址を検出し、精査をはじめめる。小竪穴の精査を進める。作業は半日。
- 11月11日 第5・6・7号住居址と小竪穴の精査を行う。第4号住居址の性格把握のため部分（2×2m）精査をはじめめる。
- 11月12日 昨日に引き続き第4・5・6・7号住居址と小竪穴の精査を行う。
- 11月14日 第5・6・7号住居址の遺物取り上げと精査を行う。小竪穴の精査を進める。

グリッド杭を抜き、埋戻しをはじめる。

11月15日 住居址と小竪穴の実測と記録。グリッドの埋戻し、機材の撤去を行う。

11月16日 住居址・小竪穴の実測と記録を行う。

11月17日 住居址・小竪穴の実測と記録、5号住居址の炉石取り上げを行い調査は終了する。

3 遺跡の位置と環境

雁頭沢遺跡（原村遺跡番号53）は、JR中央東線茅野駅の東南方約6.5kmの長野県諏訪郡原村室内にある。原村役場西方約1kmという地理的条件に恵まれていることもあり、付近の宅地化は急激に進んでいる。

遺跡は、東の八ヶ岳から流下する大早川と阿久川という2本の小河川によって北と南を浸蝕された東西に細長い尾根上にある。標高は960前後を測り、平坦部は遺跡のある部分で80mとあまり広いものではなく、その平坦部もやや北西に傾斜している。地目は普通畑で地味は良い。南斜面は比較的なだらかな傾斜をもっているのに対し、北の大早川側はかなり急な斜面となっている。

これより西は、約2,500m先でフォッサマグナの西縁である糸魚川―静岡構造線の新層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。なお、この尾根筋には、西方約1.7kmに国史跡の阿久遺跡がある。

早くから遺跡の存在は知られていたが、昭和40年頃に地主の小林重人氏が水田造成工事の折に、縄文時代中期中葉の藤内I式の一括資料を発見している。その一部は原村教育委員会で保管しているが良好な資料である。

今までに村道拡張工事に伴う緊急発掘調査を2回行い、第1次調査で、縄文時代中期中葉の藤内式の住居址1軒と小竪穴4基を、第2次調査で、汐址1と時代不詳の配石1基を発見調査し、村内では数少ない中期中葉の集落遺跡であることがわかってきた。その集落跡は、本調査の結果からみて、環状集落の南東部分は墓地によって破壊されているようである。

八ヶ岳西南麓一帯の尾根には、縄文時代を中心とした遺跡が数多く埋蔵されている。この雁頭沢遺跡の周辺には、大小様々の遺跡が分布しており、その密度は極めて高い地域で、第2図及び表1に示した。なお、原村における遺跡の高度限界は標高1,200m前後のラインである。

それらの中ですでに発掘調査されている遺跡は、20の前尾根・23の恩膳西・24の恩膳・29の向尾根・32の大横道上・33のワナバ・35の臥竜・54の宮ノ下・75の山の神上と多く、縄文時代中期から後期初頭にかけての住居址や土器・石器が数多く発見されている。

しかし、まだ発掘調査されたことのない遺跡や、調査されていてもその対象範囲が狭く、遺跡の性格については不明瞭な点がまだ多く残されているが、縄文時代中期から後期初頭にかけての



第2図 雁頭沢遺跡の位置と付近の遺跡 (1 : 20,000)

表1 雁頭沢遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
9	比丘尼原					○					○			
11	阿久			○	○	○					○			昭和50～54年度発掘調査
12	前沢				○						○			昭和55・61年度発掘調査
13	長峰				○						○			
14	裏長峰				○									
16	恩膳南										○			
17	白ヶ原				○						○			昭和52年度発掘調査
18	前尾根西				○									
19	南平				○									
20	前尾根				○									昭和44・52・54・59年度発掘調査
21	上層沢尾根				○									
22	清水				○									
23	恩膳西		○		○									昭和62年度発掘調査
24	恩膳		○			○					○			昭和62年度発掘調査
25	裏尾根				○									
26	家下				○						○			昭和59年度発掘調査
27	圃蔵沢				○						○			昭和62年度発掘調査
28	宮平											○		
42	居沢尾根				○						○			昭和50・51・52・56年度発掘調査
43	中阿久				○							○		昭和51年度発掘調査
44	原山				○						○			昭和50年一部破壊
45	広原日向	○			○	○					○			昭和58年度発掘調査
46	宿尻				○									
47	ヲシキ		○	○	○						○			昭和51年度発掘調査
48	榎の木				○									昭和53年一部破壊
49	大石	○	○	○	○						○		○	昭和50年度発掘調査
50	山の神				○	○					○			昭和54年度発掘調査
51	姥ヶ原				○	○								昭和63年度発掘調査
52	水掛平				○						○			
53	雁頭沢				○							○		昭和54・57・63年度発掘調査
54	宮ノ下		○		○						○	○	○	昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根				○	○					○			
56	家前尾根				○						○			昭和51年一部破壊
57	久保地尾根				○									昭和51年一部破壊
58	判の木										○			

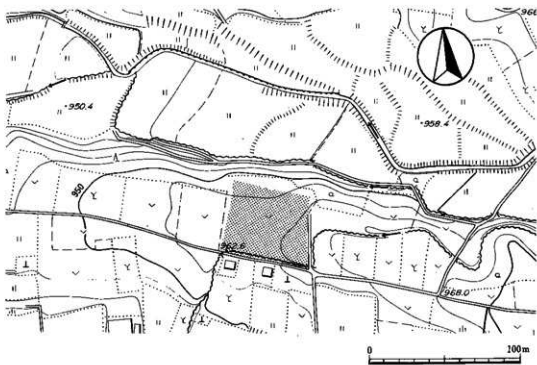
一大遺跡群が形成されている地域であることは確かなようである。

4 グリッドの設定と調査方法

発掘に先立ち、東西南北に軸を合せたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からX地区・Y地区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。その中をさらに2×2mの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分した。東西方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方は49・48・47というように南に行くにしたがい小さくなるように、北方は51・52・53と大きくなるように振り分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第5図右端の発掘グリッドの右側（2グリッドの平面発掘を実施している）でみると、大地区はX地区であり、小地区の東西方向はLラインにあたり、東西方向が62ラインで、それは「L-62」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「XL-62」となる。

なお、グリッド設定をする上で良くないことであるが、第1次調査は道路方向に軸を合せ、本調査では東西南北に軸を合せたことにより、1次と3次調査のグリッド軸に違いがある。



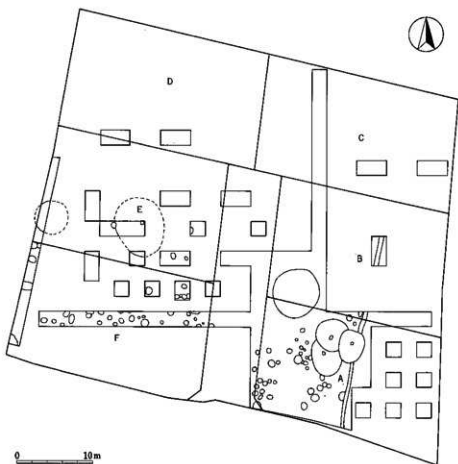
第3図 雁頭沢遺跡第3次発掘調査区域図・地形図（1：2,500）

造成地は第4図に示したようにA～Fの6区画が計画され、A区画は自然地形の一番高い地域にあたり、この区画のレベルは隣接する道路のレベルからやみくもに高くすることは設計施工上できないため精査を行い、B～Fの5区画は、A区画を基準に埋没保存を考えた設計変更を行い、西外れの石積み施工箇所は精査を行った。したがって、B～F地区の発掘は、原則として遺構検出もしくはソフトローム層上面までとした。

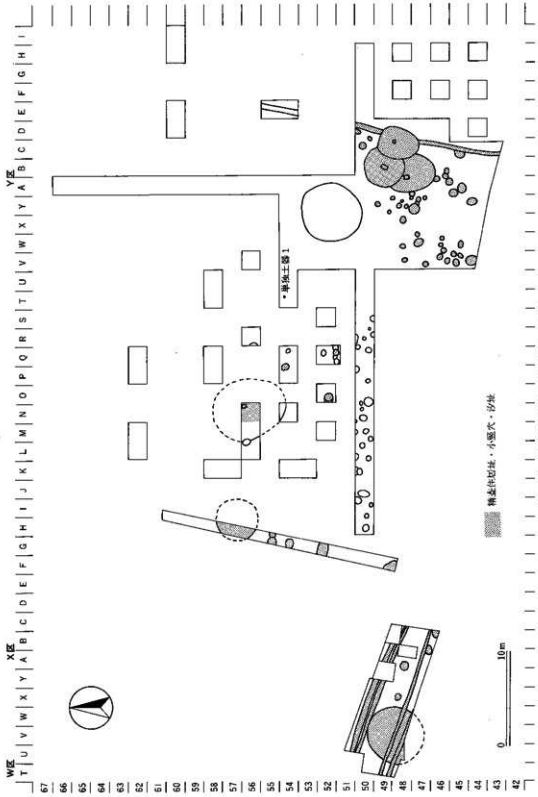
5 土 層

第4図に示したように、宅地区画Aはそのほぼ全域を、残りは遺構の埋没状況が理解できる範囲内のグリッド平面発掘を層別別々に実施した。ローム層までの深さはグリッドによって違いがみられたが20～50cmを計測した。

本遺跡の層序は、耕作によると思われる攪乱が広範囲におよんでいる上に、その深度は深くあ



第4図 造成区画と遺構配置図 (1:500)



第5図 遺構配置図1-3次 (1:400)

まり良い状態ではなかった。基本的には上層から15~20cmの耕作土(第Ⅰ層)。15cm前後の古い耕作土(第Ⅱ層)。10cm前後のローム漸移層(第Ⅲ層)。ソフトローム層(第Ⅳ層)。ローム層(第Ⅴ層)となる。

6 遺構と遺物

発掘調査において発見した遺構は、第5図の遺構配置図に示したとおり、縄文時代中期中葉の竪穴住居址6軒、小竪穴82基、単独土器1、時代不詳の汐址2である。遺物は、縄文時代中期初頭の九兵衛尾根式、中葉の藤内Ⅰ・Ⅱ式と井戸尻Ⅰ式の土器と石器がある。

住居址

埋没保存を考えた調査で全ての遺構を精査していないが、住居址は重複する5・6・7号住居址の3軒を完掘し、3・4住居址の2軒は部分的な精査を、2号住居址は確認しただけである。

(1) 第2号住居址 (第6図、写真5・6)

本址は、XX-50・XY-50・YA-51・52・53のグリッド調査で住居址を認め、重機で表土剥ぎをした後にプラン検出作業を進めた。埋土にはローム細粒と炭化物が含まれている。

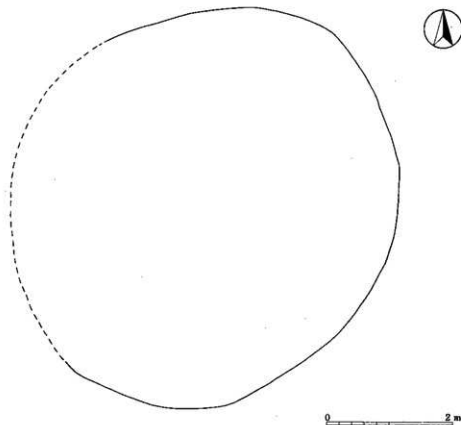
住居址の検出位置および状況等を記録した後に埋戻した。したがって詳細については不明である。検出時の平面観察は長軸6.7m、短軸6mの楕円形プランを呈し、尾根の自然傾斜からみて壁の低くなる西側は、プランを明確にすることはできなかった。これは、本址の掘り込みがそれほど深くないためであろう(写真5)。

遺物は精査をしなかったため、検出作業中に出土した土器と石器を本址の遺物とした。年代の指標となる土器は中期中葉の藤内式の破片ばかりである。石器は打製石斧・凹石が各1点(写真6)と黒曜石の剥片など出土量は少ない。

(2) 第3号住居址 (第7図、写真7~9)

本址は、西外れの石積施工箇所位置し、幅1mという狭い範囲の調査で、住居址の西側を部分的に精査しただけで、規模・性格等については不明確な点が多い。

調査箇所の壁の状態から推測して、径4~5mの円形ないしは楕円形プランであろう。壁高は北壁で18~22cm、南壁で26~29cmを計測する。床はローム層を掘り下げたタタキ床であるが、中央に向かい僅かに傾斜し全般的にあまり硬くない。柱穴は4本検出した。径は40~50cm、深さはP1が66cm、P2が43cm、P3が61cm、P4が50cmを計測するしっかりしたものである。なお、



第6図 第2号住居址検出図(1:60)

P4の上面にはロームを用いた貼床が認められた。部分調査ではっきりしたことはいえないが、その状態から重複が考えられる状態ではなく、建て直しが行われたものと思われる。

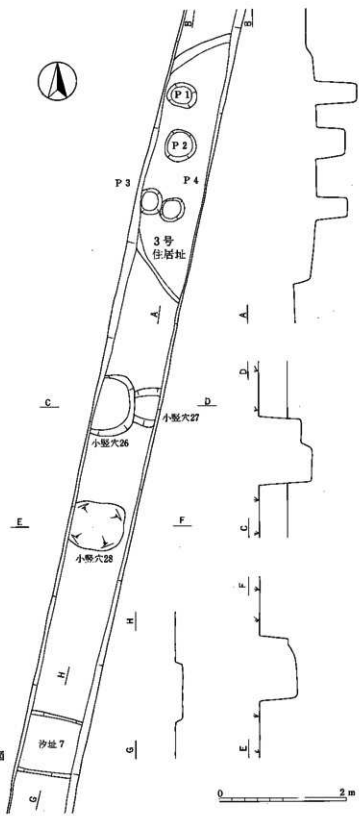
遺物の出土量は少ない。年代の指標となる土器は中期中葉の藤内式で、胴下半を欠損する深鉢(写真8・9)と僅かな破片がある。石器は破損した打製石斧・凹石が各1点と黒曜石の剥片などである。

(3) 第4号住居址 (第8図、写真15~19)

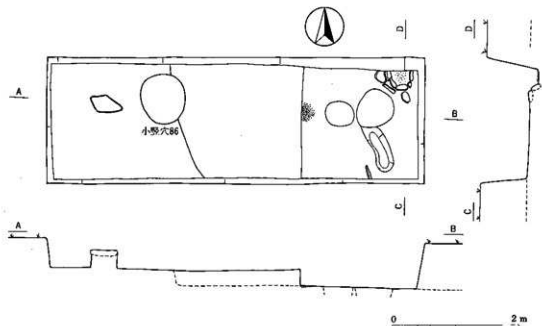
本址は、XN-54、XM-56、XN-56グリッドで住居址の埋没を認め、XN-56グリッドを床面まで精査した(写真10)。

部分的な精査でしっかりしたことは判らないが、径6~8mの円形ないしは楕円形プランになろう。なお、西壁部分で小竪穴86と重複する。平面観察で小竪穴が新しく本址の方が古い。

2×2mの範囲の調査であったが、検出面から床までは23~28cmを計測する。床はローム層を振り下げたタタキ床であるがあまり硬くない。調査グリッド北東隅に内幅28cmの方形石囲炉が構築されていた。炉石は二重にめぐり、内側の石は立てられているが、外の石は立てられたものと



第7图 第3号住居址·
小竖穴·沙址实测图
(1:60)



第8図 第4号住居址実測図(1:60)

据え置かれたものがある。炉内の焼土はあまり強くない(写真11)。調査グリッド西外れの床面は地床炉状に焼けている。この焼土の方が炉内よりも強いくらいである。柱穴ないしは貯蔵穴と思われる穴の発見もあったが、その上面を精査しただけで完掘していない。

遺物の出土量は精査面積の割に多い。年代の指標となる土器は中期中葉の藤内式と井戸尻式で、復元可能な深鉢1点、胴上半部を欠損する深鉢2点、約3分の1個体が残存する深鉢1点(写真12~17)、復元可能な橢形文土器1点(写真18)と数多い破片がある。石器は打製石斧2点と破損品、磨製石斧の破損品3点、石匙2点(写真19)、凹石1点、黒曜石の剥片などである。

(4) 第5号住居址 (第9図、写真20~37)

本址は、沙址6に切れ、西側で6・7号住居址と重複する。検出時の平面観察で本址が新しく6・7号住居址の方が古い(写真20)。

住居址は長軸4.2m、短軸3.3mのタマゴ形を呈し、壁の立上りは普通で、壁高は北壁で15~27cm、南壁が18~28cm、東壁が27~28cmを計測する。床はローム層を掘り下げたタタキで硬く良好である。主柱穴はP1~P4の4本と思われるが、径は35cm位で深さはP1が54cm、P2が60cm、P3が42cm、P4が58cmを計測するしっかりしたものである。P5もその形状と位置関係から柱穴と思われるが、11cmと浅いものでP1~P4とは性格が違うようである。P6は部分的に袋状となる貯蔵穴で、深さは52cmである。中央やや北寄りに内径22cmの「コ」の字形石囲炉がある。その状態からみて当初は方形石囲炉であったものが、南側の石が抜き取られたようである。性格

に付いては不明であるが、床面に密着した状態の礎数個がある（写真21・22）。

遺物の出土量が多い。年代の指標となる土器は中期中葉の藤内式で、復原可能な深鉢4点、半分位が残存する深鉢3点（写真24～33）と破片がある。一括土器は原形を止めた状態で出土したものが多く（写真24・25・27）。有孔銅付土器の口縁部破片もあり、内・外壁とも赤色顔料が顕著に残っている。石器は打製石斧（写真24）、凹石、表面に敲打痕が顕著に認められる棒状の安山岩、黒曜石の剥片などである。

(5) 第6号住居址（第9図、写真19・20・35）

本址は、東側で5号住居址と、南側で7号住居址と重複する。検出時の平面観察で5号住居址が新しく本址の方が古い。7号住居址との関係は明確にできなかった（写真20）。床面のレベルもほぼ同様で貼床・掘り込みはみられず、やはりここでも新旧関係を把握することはできなかった。

住居址は径4～5mの円形ないしは楕円形を呈し、北壁の一部のみみられるだけで、高い箇所でも21cmを計る。西壁はローム層を掘り下げたタタキ床であるが、凹凸が著しくあまり良くない。西側半分はローム層直上が床面になるものと思われる。しかし、軟弱で積極的に床面と認定できる状態ではなかった。P7とP8が本址の主柱穴と思われる他は不明である。径はP7が40cm、P8が38cm。深さはP7が44cm、P8が41cmを計測するしっかりしたものである。住居はほぼ中央に地床がある。焼けた範囲は160×50cmと広く、焼土の厚さは5cmを計る。

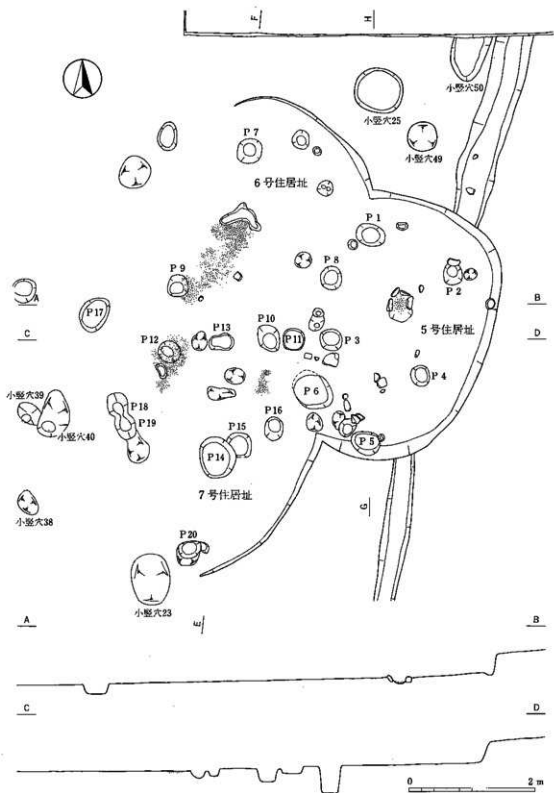
遺物の出土量は少ない。年代の指標となる土器は中期初頭の九兵衛尾根式であるが、小破片が9点出土しただけである（写真35）。石器は黒曜石の剥片がある。

(6) 第7号住居址（第9図、写真19・20・36）

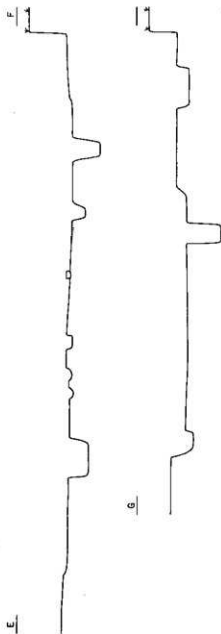
本址は、東側で5号住居址と、北側で6号住居址と重複する。検出時の平面観察で5号住居址が新しく本址の方が古い。6号住居址との関係は明確にできなかった（写真20）。床面のレベルもほぼ同様で貼床・掘り込みはみられず、やはりここでも新旧関係を把握することはできなかった。

住居址は径5～6mの円形ないしは楕円形を呈し、東壁の一部のみみられるだけで高い箇所でも11cmを計る。南から西壁はローム層の自然傾斜の低い部分にあたり自然消滅している。床は東側の一部がローム層を掘り下げたタタキ床であるがあまり良くない。西側はローム層直上が床面となる部分と、すでに消滅してしまっている部分がある。柱穴状のものはあるが、どれが主柱穴になるのかわからない。地床が2カ所に認められた。住居はほぼ中央のP12に重なる焼土はしっかりしていて、90×50cmの範囲が焼けP12の深さは16cmで性格については不明である。P10の南方の焼土は40×20cmでやはりしっかりしている。P19の南方の焼土は50×30cmで浅い穴になっているがしっかりしたものではない。

遺物の出土量は少ない。年代の指標となる土器は中期初頭の九兵衛尾根式であるが、小破片が



第9图 第5·6·7号住居址·小竖穴·沙址实测图 (1:60)



5点出土しただけである。石器は刃部を破損した打製石斧1点(写真36)と黒曜石の剥片などである。自然遺物はクルミの炭化破片がある。

小 豎 穴

小豎穴は、第5図と表2に示したように82基を検出し、47基の精査を行っているが、完形に近い土器が埋設されていたもの、石器が埋設されたもの、無遺物のものに大別でき、その形状も円形と楕円形に分けることができる。遺物が埋設されていた小豎穴は比較的深く、遺物を伴わないものは浅いようである。

ここでは、遺物を伴出した小豎穴につきおおまかな説明を加えてみたい。カッコ付けは重複するものの現状の大きさと、未確認部分があるものの現状の数値を示した。

(1) 小 豎 穴 5

(第10図1、写真37-39)

X P-54・X Q-54グリッドで検出した。平面形は長軸84cm、短軸62cmの隅丸長方形を呈し、深さ44cmの平底となる。土器は破損した状態で埋まっていたが、中期中葉の竈内式で約2分の1が残存する(写真38・39)。石器は黒曜石の剥片が1点出土した。

(2) 小 豎 穴 6

(第10図2、写真38)

X O-52グリッドで検出した。2基の小豎穴の重複であるのか、1基の小豎穴であるのか明確にできなかった。ここでは1基の小豎穴と考えておきたい。西端に未精査部分を残すが長軸(96)cm、短軸92cmの楕円形を呈し、西側は2段に落ち込む、その西側の深さは19cm、深い東側は55cmを計測し平底となる。上面には31×23cmと30×11cmを計る大きな石が重なった状態で出土した。小豎穴の上面に据え置かれたものであろう。年代の指標となる土器は中期中葉の竈内式の小破片が2点ある。石器は横刃形石器の優品・打製石斧・凹石が各1点と黒曜石の剥片がある。

(3) 小 豎 穴 7 (第10図3、写真41~43)

XQ-51・52グリッドで検出した。小豎穴81・82と重複しているが、本址が新しく小豎穴81・82の方が古い。平面形は長軸72cm、短軸58cmの楕円形を呈し、深さ27cmの平底となる。土器は口縁部を僅かに欠損する深鉢1点(写真41~43)とみみずく把手1点で、中期中葉の露内式である。石器の発見は無い。

単 独 土 器

(1) 単 独 土 器 1 (写真44)

ソフトローム層直上で、上半部を欠損する深鉢が横倒した状態で出土した(写真44)。その下層には土器と同大の浅い凹穴はあるが、小豎穴として認められるような状態ではなかったことから、単独土器と呼称したが性格は不明である。

汐 址

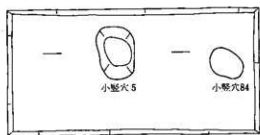
第5図に示したとおり、汐址6と汐址7を検出し、部分的な精査を行った。

(1) 汐 址 6 (第9図、写真20・21・41・43)

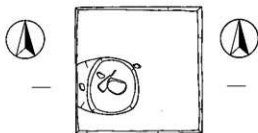
造成A区画とYE-54・55グリッドで検出し、A区画の精査を行った。5号住居址、小豎穴24と重複しているが、本址が新しく5号住居址と小豎穴24の方が古い。汐はほぼ南北に走り、幅は35~40cm、深さ3~17cmを計測する。底には沈澱した状態で小石と砂が認められ水の流れたことを物語っている。遺物の発見は皆無で時期決定はできない。

(2) 汐 址 7 (第12図)

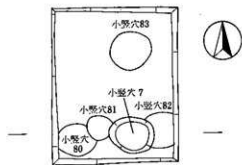
西外れの石積地行箇所検出した。部分調査で汐址であるのか、それとも小豎穴状のものであるのか明確にできなかった。底に僅かであったが沈澱した状態に砂が認められたことから汐址とした。幅は97cm、深さ11~14cmを計測する。遺物の発見は皆無で時期決定はできない。



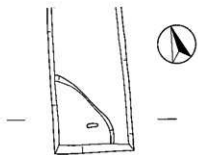
1. 小竖穴5・84



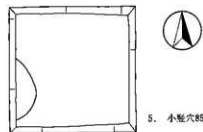
2. 小竖穴6



3. 小竖穴7・80~83



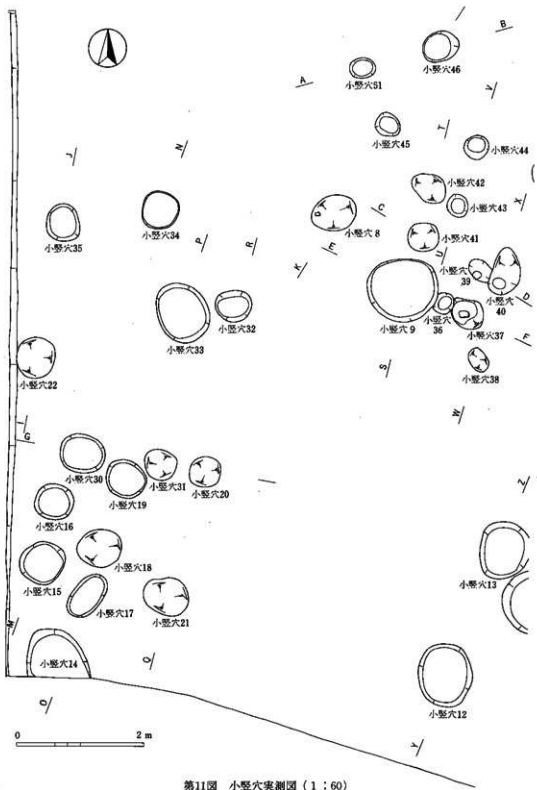
4. 小竖穴29



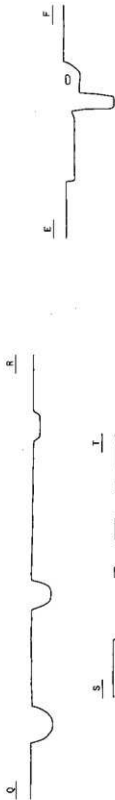
5. 小竖穴85

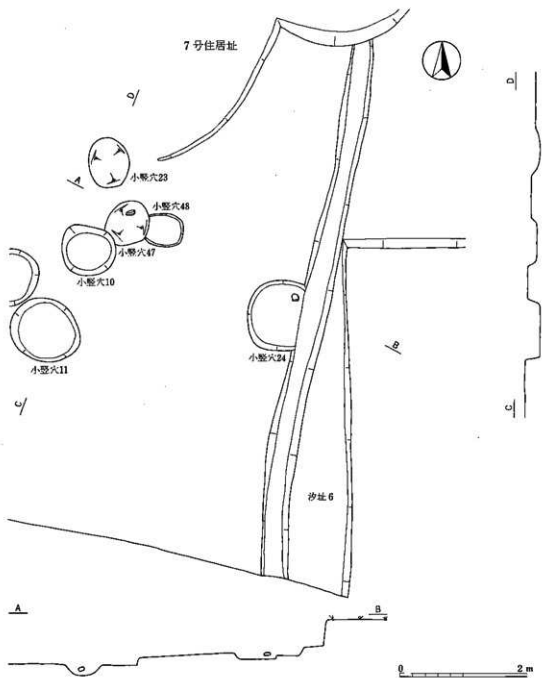


第10图 小竖穴実測図・検出図 (1:60)

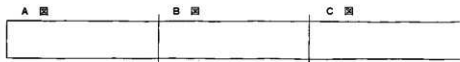


第11图 小竖穴实测图 (1:60)





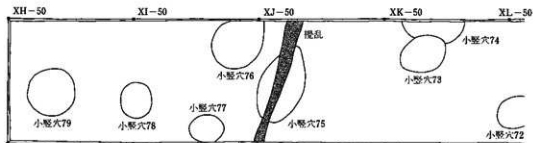
第12圖 小壑穴・沙址実測圖 (1 : 60)



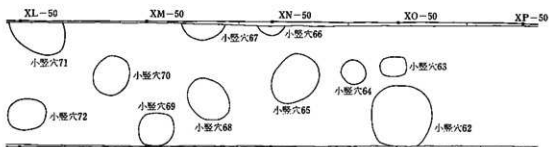
実測分割図



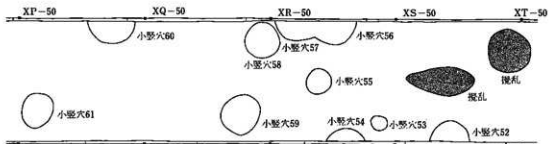
A 園



B 園



C 園



0 2 m

第13圖 小壜穴検出図 (1 : 60)

表2 小竪穴一覧

精査済小竪穴

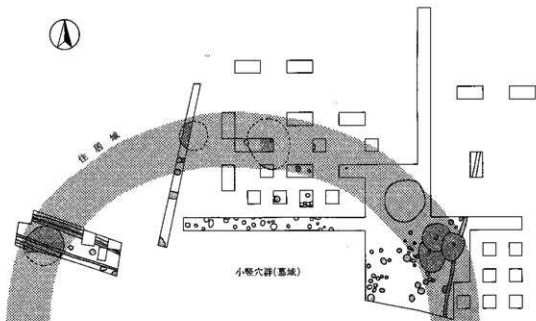
番号	図版番号	横出位置 グリッド	平面形	規 模			埋土の状態・出土遺物など
				長軸	短軸	深さ	
5	第10図1	XP-54 XQ-54	隅丸長方形	84	62	44	网上半部欠損深鉢1、土器破片2、黒曜石 剥片1
6	第10図2	XO-52	楕円形	(96)	92	56	含炭化物黒褐色土・土器破片2、横刃形石 器1、打製石斧1、凹石1、黒曜石剥片3
7	第10図3	XQ-51 XQ-52	楕円形	72	58	27	含炭化物褐色土 小竪穴81・82と重複 完 形深鉢1、みみずく把手1、土器破片1
8	第11図	XX-48	楕円形	72	56	28	黒曜石剥片1
9	第11図	XX-47 XY-47 XY-48	円形	114	100	15	小竪穴36と重複 土器破片2、黒曜石剥片 3、燧岩剥片1
10	第12図	YA-45 YA-46	楕円形	85	78	17	含炭化物褐色土 小竪穴47と重複 土器破 片7、黒曜石剥片2
11	第12図	YA-45	円形	110	102	23	含炭化物黒色土 土器破片1
12	第11図	XY-44 XY-45	楕円形	100	86	23	
13	第11図 第12図	XY-45 YA-45	楕円形	92	82	16	含炭化物褐色土 黒曜石剥片1
14	第11図	XV-44 XV-45		100	(76)	23	打製石斧1、礫1
15	第11図	XV-45	円形	72	70	20	土器破片5 ホルンフェルス剥片1
16	第11図	XV-45 XV-46	円形	62	58	14	
17	第11図	XV-45	長楕円形	80	48	25	土器破片1
18	第11図	XV-45	楕円形	70	62	27	
19	第11図	XV-46 XW-46	円形	62	60	8	
20	第11図	XW-46	円形	48	48	32	
21	第11図	XW-45	楕円形	72	60	35	
22	第11図	XV-47	楕円形	64	59	20	
23	第9図	YA-46	楕円形	80	64	19	含炭化物黒褐色土 7号住居址と重複 上 層破片3
24	第12図	YB-45 YC-45	円形	112	(82)	14	含炭化物褐色土 砂土6と重複
25	第9図	YC-50	円形	76	70	20	黒曜石剥片3
26	第7図	XG-55		98	(62)	36	含炭化物黒色土 小竪穴27と重複 黒曜石 剥片1
27	第7図	XG-55 XH-55		62	(40)	23	小竪穴26と重複
28	第7図	XG-54		(82)	76	15	
29	第4図 第10図	XF-48 XF-49		(118)	(84)	23	礫(燧石)1
30	第11図	XV-46	楕円形	72	62	12	
31	第11図	XW-46	円形	50	48	26	

番号	図版番号	検出位置 グリッド	平面形	規 模			埋土の状態・出土遺物など
				長軸	短軸	深さ	
32	第11回	XW-47	楕円形	58	50	11	
33	第11回	XW-47	楕円形	100	80	17	
34	第11回	XW-48	円形	60	59	6	
35	第11回	XV-48	楕円形	60	52	21	黒曜石剥片 1
36	第11回	XY-47	円形	34	(27)	25	小整穴9・37と重複 7号住居址のビットか
37	第11回	XY-47	不整形円形	60	49	26	小整穴36と重複 7号住居址のビットか
38	第9回	XY-47	楕円形	40	30	18	7号住居址のビットか
39	第9回	XY-47 XY-48	楕円形	(40)	30	30	小整穴40と重複 7号住居址のビットか
40	第9回	XY-47 XY-48 YA-47 YA-48	不整形円形	74	44	39	小整穴39と重複 7号住居址のビットか
41	第11回	XY-48	円形	48	45	17	
42	第11回	XY-48	楕円形	58	44	24	
43	第11回	XY-48	円形	35	34	16	
44	第11回	XY-48 XY-49	円形	38	38	45	
45	第11回	XX-49 XY-49	楕円形	40	37	17	
46	第11回	XY-49	楕円形	60	46	25	
47	第12回	YA-46 YB-46	楕円形	(70)	65	21	含炭化物褐色土 小整穴10・48と重複
48	第12回	YB-46	楕円形	(56)	51	17	小整穴47と重複
49	第9回	YC-50	円形	46	46	33	
50	第9回	YD-50		(68)	62	20	
51	第11回	XX-49	楕円形	42	32	15	

未精査小整穴

52	第13回	XS-50		66	(32)		含ローム黒褐色土
53	第13回	XR-50	楕円形	27	23		含ローム黒褐色土
54	第13回	XR-50		62	(22)		含ローム黒褐色土
55	第13回	XR-50	円形	38	38		含ローム黒褐色土
56	第13回	XR-50		(66)	(32)		含ローム褐色土 小整穴57と重複
57	第13回	XR-50		(72)	(30)		含ローム褐色土 小整穴56と重複
58	第13回	XQ-50 XR-50	円形	55	55		含ローム黒褐色土
59	第13回	XQ-50	円形	62	62		含ローム黒褐色土
60	第13回	XP-50		78	(32)		含ローム黒褐色土
61	第13回	XP-50	楕円形	54	48		含ローム黒褐色土
62	第13回	XN-50 XO-50	円形	96	96		含ローム黒褐色土

番号	図版番号	検出位置 グリッド	平 面 形	規 模			埋土の状態・出土遺物など
				長軸	短軸	深さ	
63	第13図	XN-50 XO-50	楕円形	42	30		含ローム黒褐色土
64	第13図	XN-50	円形	40	40		含ローム黒色土
65	第13図	XN-50	楕円形	84	74		含ローム黒褐色土
66	第13図	XM-50 XN-50		42	(14)		含ローム黒色土
67	第13図	XM-50		50	(24)		含ローム・炭化物黒褐色土
68	第13図	XM-50	楕円形	74	58		含ローム・炭化物黒色土
69	第13図	XL-50 XM-50	円形	56	52		含ローム・炭化物黒褐色土
70	第13図	XL-50	円形	62	58		含ローム黒色土
71	第13図	XK-50 XL-50		84	(51)		含ローム・炭化物黒褐色土
72	第13図	XK-50 XL-50	楕円形	62	48		含ローム褐色土
73	第13図	XK-50	楕円形	76	58		含ローム黒褐色土 小竪穴74と重複
74	第13図	XK-50		98	(32)		含ローム黒褐色土 小竪穴73と重複
75	第13図	XJ-50	長楕円形	128	70		含ローム・炭化物褐色土
76	第13図	XI-50 XJ-50		82	(76)		含ローム・炭化物黒褐色土
77	第13図	XI-50	楕円形	54	42		含ローム褐色土
78	第13図	XH-50 XI-50	楕円形	56	48		含ローム黒褐色土
79	第13図	XH-50	円形	75	75		含ローム炭化物黒褐色土
80	第10図3	XQ-51 XQ-52		(62)	50		含ローム褐色土 小竪穴81と重複
81	第10図3	XQ-51 XQ-52	円形	(38)	38		含ローム黒褐色土 小竪穴7・80と重複
82	第10図3	XQ-51 XQ-52		58	(47)		含ローム褐色土 小竪穴7重複
83	第10図3	XQ-52	円形	64	62		含ローム黒褐色土
84	第10図1	XQ-54	楕円形	58	40		含ローム褐色土
85	第10図5	XR-56		98	(32)		含ローム褐色土
86	第8図	XL-56 XM-56	楕円形	78	69		含ロームブロック褐色土 4号住居址と重複



第14図 集落概念図

7 ま と め

今回の発掘は、埋没保存を考えた調査で、完掘した住居址と小竪穴もあるが、部分調査、検出だけのものが多く、個々の遺構を分析するには限界はある。土器は完形と半完形で16個体得られた。いずれも縄文時代中期中様の藤内Ⅰ式、Ⅱ式、井戸尻Ⅰ式に属するものであった。このほかに初頭の九兵衛尾根式の破片が少しある。

住居址についてはその埋没が把握できる密度のグリッド発掘を実施しているし、小竪穴は、その分布傾向が理解できる状態の調査とした。住居址の年代は、出土土器からみて初頭の九兵衛尾根と中葉の藤内・井戸尻期のものであり、遺構の分布状態は、外に住居域がめぐり、そこからその内側に小竪穴が集中し、中央に広場を有するいわゆる馬蹄形とか、環状と呼ばれる集落形態を示し、中期の教科書ともいえるものである。

発見した住居址はそれほど多くなく、重複もみられはしたが比較的単純で、同時存在の遺構を明確に性格付けをすることが調査に携わった者の責務である。果たすことはできなかったが、中期前半の研究上における好資料となろう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参 考 文 献

- 1974.07 諏訪清陵高等学校地歴部考古班「原村の考古学的調査 上」(『土』8)
1980.03 長野県教育委員会『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
1980.09 平出一治「昭和54年度発掘調査概要 雁頭沢遺跡」(『長野県考古学会誌』38)
1985.07 原村役場『原村誌 上巻』

発掘調査団名簿

- 団 長 平林 太尾 (原村教育委員会教育長)
調査担当者 平出 一治 (原村教育委員会)
調 査 員 鶴田 典昭 (明治大学大学院) 山形真理子 (東京大学大学院)
伊藤 証 (原村教育委員会)
調査補助員 平林とし美
調査参加者 菊池 利光 小池 修次 芳沢 一夫 小林 静子 藤原智恵子 宮坂とし
子 藤原 千文 中村 順子 菊池 卓子 中村ふさ美 五味かづ美 五
味とし美 小池一二三 五味まさ子 (順不同)
事 務 局 原村教育委員会事務局——行田 竹輝 (教育次長) 武田伊都子 (庶務係長) 大口美
代子 (主任) 佐賀 正憲

写 真 图 版



写真1 遺跡遠景(南西から)



写真2 遺跡遠景(北東から)

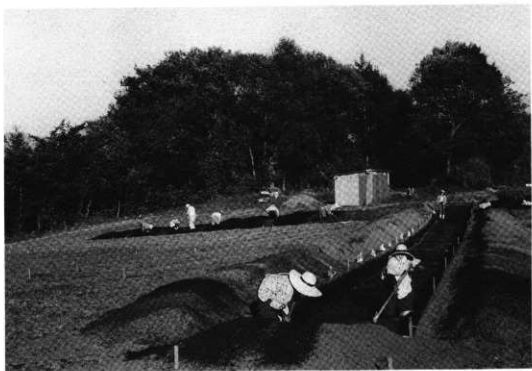


写真3 発掘風景



写真4 発掘風景



写真5 2号住居址検出状態（南から）



写真6 2号住居址土器と石器

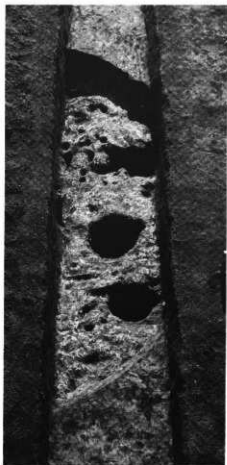


写真7 3号住居址（北から）



写真8 3号住居址土器1 出土状態



写真9 3号住居址土器1



写真10 4号住居址検出状態と部分発掘（西から）



写真11 4号住居址石囲炉（北から）



写真12 4号住居址土器出土状態



写真13 4号住居址土器1出土状態



写真14 4号住居址土器1



写真15 4号住居址土器2



写真16 4号住居址土器3



写真17 4号住居址土器4



写真18 4号住居址土器5



写真19 4号住居址石器



写真20 5・6・7号住居址と沙址6検出状態(西から)



写真21 5・6・7号住居址と沙址6（西から）



写真22 5号住居址（西から）



写真23 5号住居址石囲炉（北から）



写真24 5号住居址遺物出土状態（西から）



写真25 5号住居址土器1・4・5出土状態



写真26 5号住居址土器1



写真27 5号住居址土器2出土状態



写真28 5号住居址土器2



写真29 5号住居址土器3

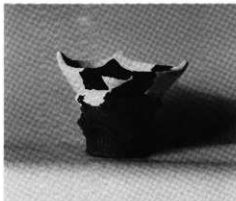


写真30 5号住居址土器4



写真31 5号住居址土器5

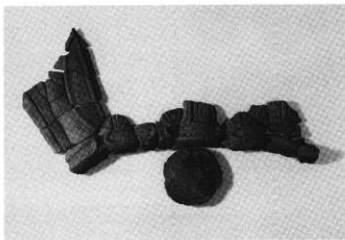


写真32 5号住居址土器6



写真33 5号住居址土器7

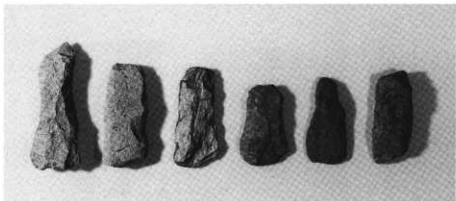


写真34 5号住居址石器

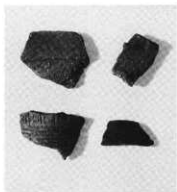


写真35 6号住居址土器



写真36 7号住居址土器と石器

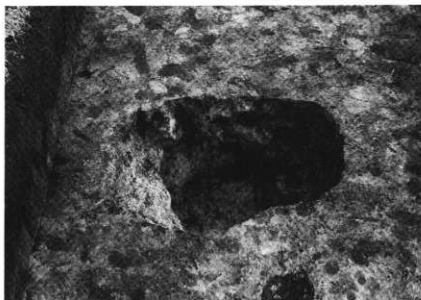


写真37 小 罎 穴 5



写真38 小竖穴5土器出土状態



写真39 小竖穴5土器

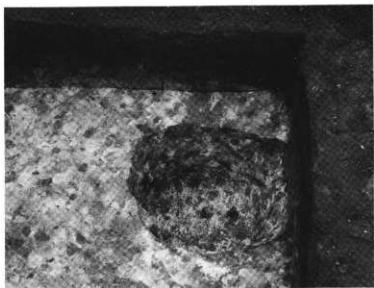


写真40 小竖穴6

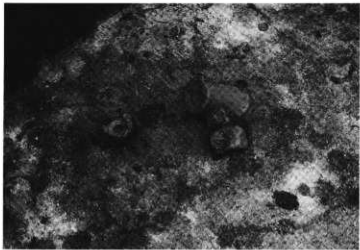


写真41 小竖穴7土器出土状態①

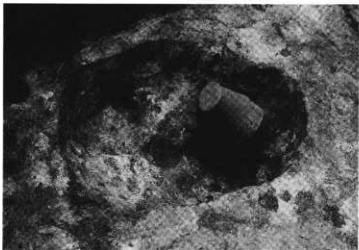


写真42 小竖穴7土器出土状態②

写真43 小竖穴7土器





写真44 小竪穴10～13・23・24・47・48と沙址6（西から）

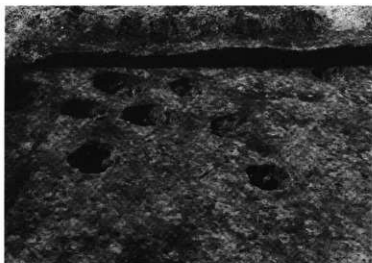


写真45 小竪穴14～22（東から）



写真46 小竪穴24と沙址6（西から）



写真47 单独土器1出土状态



写真48 遺構外石器 ①



写真49 遺構外石器 ②

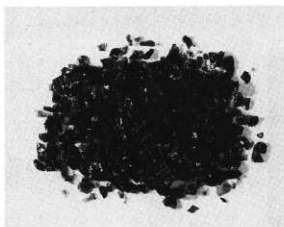


写真50 遺構外黒曜石剥片

原村の埋蔵文化財16

雁頭沢遺跡（第3次）

住宅団地造成に伴う緊急発掘調査概報

発行日 平成元年3月31日

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 ミウラ企画書籍

